

Title	父親の子育てによって公私領域がゆらぐ可能性：父親の居場所と性別役割分業
Author(s)	巽, 真理子
Editor(s)	
Citation	人間社会学研究集録 .9 ,p.23-43
Issue Date	2014-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10466/13770
Rights	

父親の子育てによって公私領域がゆらぐ可能性

——父親の居場所と性別役割分業——

巽 真理子¹

1. はじめに

日本では明治末からの近代化の中で、父親は雇用労働者として家族の稼ぎ手役割を一手に引き受けると同時に、家庭の中に居場所を失っていった（沢山 2013）。それは、職場という公領域を居場所とし、家庭における子育てなどのケア役割から疎外されていく過程であった。その後、戦後の高度経済成長を支えた「家族賃金」など日本的経営システムに適合的だった性別役割分業は、雇用労働者の増大とともに大衆化していく（宮坂 2008）。

父親の子育てが推奨される現代でも、未子が6歳未満の父親の育児時間は1日あたり39分で母親（202分）の約5分の1（総務省 2011）と性別役割分業は固定的であり、「父親文化」は育ってきているが「父親行動」は必ずしも追いついていない（石井クンツ 2013）。人には依存が必然であるためケアも必然であり（キテイ 2010）、子どものケア（子育て）にも性別に関係なく関わっていくことが必要である。

父親の子育ての意義については、これまで子どもの発達や母親の育児不安解消、父親自身の発達など、個人に対する影響という視点から研究されてきた。しかし、性別役割分業解消のためには、これらに加えて、性別役割分業を規定する公私領域という視点からの研究が必要である。そこで本稿では、父親の子育てによって公私領域がゆらぎ、性別役割分業を解消する可能性についての仮説を構築する。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では本稿の問題意識に沿って先行研究を整理し、分析視点を示す。次に、第3章で父親の育児体験談から、父親の子育てと公私領域における父親の居場所と各領域の境界の浸透性について分析し、第4章でその考察を行う。最後に第5章で今後の課題も含めてまとめを行う。

2. 先行研究

本稿に関連するものとして、父親の子育ての意義、公私領域、そして、居場所についての先行研究をみていく。

¹ 大阪府立大学大学院 人間社会学研究科 博士後期課程（人間科学）

まず、父親の子育ての意義についての研究は、大きく次の3つに分けられる。(1)子どもの発達へ与える影響の重要性(ラム 1981;加藤・石井クンツ・牧野・土谷 2002;佐々木 2009 ほか)、(2)母親の育児不安や育児ストレスの軽減(牧野 1982;松田 2001;星 2012 ほか)、(3)子育てによる父親自身の発達・変化への影響(柏木・若松 1994;牧野 1996;庭野 2007 ほか)。このうち、(3)子育てによる父親自身の発達・変化への影響は、生涯発達の観点から父親自身の変化をみていくものである。庭野(2007)は、父親が「世話役割」へ至る契機として「子どもと2人きりになる時間をもつこと」を示唆した上で、父親は子育てをすることによってリベラルな性別役割分業意識をもつようになるという仮説を導き出した。この研究は、意識が行為を規定するだけでなく、子どもの世話という行為が父親の性別役割分業意識に影響することを明らかにした点が意義深い。さらに、このような父親個人の意識・行為の変化が周りの領域とその中の人びとに与える影響をみていくことによって、性別役割分業を解消する契機をみつけることができると考える。

本稿では、この父親の意識・行為と公私領域の関連を考察するために、ワーク・ファミリー・ボーダー理論(Clark 2000)を援用する。この理論は、どのように人が領域間の境界(Border)を通して行き来しながらワーク・ファミリー・バランスをとるのかを考察するための作業仮説であり、家庭と職場を目的や文化が異なり互いに影響し合う領域と位置づけ、その境界の強度は浸透性・弾力性・混合性の組み合わせで決定するとしている。このうち浸透性とは、その領域内に別の領域の要素が侵入することを、どの程度認めるかということである。そして、境界を行き来する人(Border-crossers)の意識・行為と、各領域のメンバーとの関係・交渉のあり方などを考察する。この理論を援用することによって、個人の意識や行為についてだけでなく、その人をとりまく領域や、領域内のメンバーとの関係性などについて総合的に考察することができる²。特に、境界の浸透性をみることによって、領域間の影響やゆらぎをみるのが可能になると考える。

理論上の公私区分については、フェミニズムから、リベラリズムの正義論における公私二元論が社会を非家庭/家庭と区分することで、その正義から家庭領域とその中のケア、およびケアを主に担う女性を排除しているとの批判があ

² なお本稿では分析対象として投稿記事を扱うため、父親が実際に境界をどのように行き来しているかについて観察することは難しい。これについては後述するが、今後の課題としたい。

り、公私区分の再検討やケアの重要性の見直しを訴えている。人にとって依存は必然だというキテイ（2010）は、多くの場合に女性は子どもや高齢者などの依存者へのケア役割を担うため、男性中心の職場領域で平等を達成しえず二次的依存³の状態になると指摘する。また、フレイザー（2003）は、主に男性の稼ぎで家族の生計を立てる「家族賃金」は現代の脱工業化社会では仮定できないとして、男女ともに稼ぎ手で無償のケアも担う「総ケア提供者モデル」を提案する。

これらは、ケアの重要性・必然性の尊重から性別役割分業の見直しの必要性を主張する、重要な議論である。しかし、女性がケアにしばられ公領域から疎外されている一方で、男性が稼ぎ手という「男らしさ」から公領域にしばられ、ケアから疎外されているという視点はみられない。

父親研究では、父親は稼ぎ手役割を脅かさない範囲内で子育てをすることが多く（船橋 2006；多賀 2011）、母親同様に子育てをしている父親でも男性としての稼ぎ手役割が重要だと考えている（Ishii-Kuntz 2003）ことが明らかになっている。また、母親への差異化などによって「父親の子育て」が男性化されると、ジェンダーを再生産する（巽 2013）。つまり、公私二元論にもとづく性別役割分業を前提に、父親の子育てというケア役割は母親とダブルスタンダードのまま、「子育て経験が仕事のスキルアップにつながる」という言説などによって、家庭（私領域）から切り離されて職場（公領域）に結びつけられる可能性がある。したがって、ケアと公私領域に関する議論は、「公領域を主な居場所とする男性である父親」と「子育てというケア」との関係性をみていく上でも有効である。そこで本稿では、上記のフェミニズムによる議論をふまえて公私領域を「家庭／非家庭」と定義した上で、職場領域以外の公領域として「地域領域」を加え、公領域内の相違点についてもみていきたい。

最後に、居場所研究をみていく。本稿の分析に「居場所」概念を援用することは、父親の子育てによる各領域の変容の考察に有効だと考える。居場所研究は主に臨床心理学分野で発展したもので、その概念は統一されていない。「居場所」は子どもの不登校が社会問題化した後から心理的な意味で使われ始め、心理学においては、居場所を「他者とのつながりという関係性」と捉えるものを中心として、その関係性から生まれる社会的位置づけも含むものがみられる（石本 2009）。今では

³ 「経済的依存は多くの場合、同時に精神的・政治的・社会的依存と弱体化の状態を引き起こす。これは二次的依存、あるいは派生的依存と呼ぶことができる」（キテイ 2010：102）。

研究対象は青年や高齢者、母親にも広がり、その中で、父親の居場所感は安心感・役割感・受容感の3因子から構成されることが明らかになっている（中西 2000）。そこで本稿では、「居場所」を「他者と経験や役割、気持ちを理解し合うことなどによって、安心してそこに居ることができる関係性や場」と定義する。

次章以降では、家庭・職場・地域領域や各領域内のメンバーとの関係などから、(1)父親の子育てへの積極性の違いと居場所の有無、(2)子育てをする父親の各領域内の居場所と領域の境界の浸透性の変容、(3)公領域である職場・地域領域間の相違点、に注目して考察する。

3. 育児体験談にみる公私領域内の父親の居場所と境界の浸透性

3-1 使用データと分析方法

本稿では、イクメンプロジェクトのホームページ（厚生労働省 2013、以下、「HP」）の「育休・育児体験談」の言説分析を行う。これは、父親自身がHPにイクメン宣言登録をする際に任意で投稿するものである。自由記述方式のため人によって記入内容が異なり、その父親の子育てに関する意識や行為を把握しきれないという限界はあるが、基本的に子育て中の父親からの投稿に限られるため、記事から父親の子育ての現状をみることができ⁴。本稿では、2010年6月⁵～2013年7月に投稿された体験談519件のうち、配偶者の存在が確認でき⁶、データ重複や育児体験の記載がないものを除く373件について分析する。

分析方法としては、各記事に居場所に関する文章があれば領域別に抜き出し、前述の分析視点に基づいて行った。

3-2 分析結果

分析対象の父親の年齢は20～50歳代で平均30.1歳代、子ども数は平均1.6人。記事の多くは、現在、未就学児の子育て真っ最中というものである。

また、記事を父親の子育てへの積極性別に分類すると、実際に育休を取得し

⁴ このデータは厚生労働省が委託運営するHPに掲載されているものであるため、イクメンプロジェクトという政策主旨に賛同している父親からの投稿に限られる点は否めない。

⁵ 投稿の受付開始時期はHP上では確認できないが、プロジェクト発足と同時にイクメン宣言の募集を開始していることから（厚生労働省 2010）、2010年6月と推定される。

⁶ 家庭領域内の性別役割分業を考察するため、本稿では配偶者がいる事例に限定した。

たもの（以下、「育休取得」）が 142 件⁷、育休は取得していないが日頃から積極的に子育てに関わるもの（以下、「積極的」）が 146 件、仕事に支障のない範囲でできるだけ関わるもの（以下、「できる範囲で」）が 85 件である。前述のとおり、この体験談はイクメン宣言の際に投稿するものであるため、子育てに積極的な「育休取得」と「積極的」の件数が多くなっていると考えられる。

表 1 領域および子育てへの積極性別 居場所についての記事件数

子育てへの 積極性	領 域					
	家庭		職場		地域	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	88	62.0%	52	36.6%	27	19.0%
積極的	89	61.0%	12	8.2%	18	12.3%
できる範囲で	44	51.8%	0	0.0%	3	3.5%

※同じ記事の中に異なる領域についての記述がある場合は、それぞれの領域に 1 件と数えた。
比率は、各子育てへの積極性における割合。

居場所についての記事を領域および子育てへの積極性別にしたものを表 1 に示す。これをみると、家庭領域については「できる範囲で」では少し下がるものの子育てへの積極性による差はそれほど大きくない。また、「育休取得」は職場・地域領域についても一定数の記事があるのに対して、「積極的」は地域領域については「育休取得」と同程度であるものの職場領域ではかなり少なくなり、「できる範囲で」は地域領域がぐんと減り、職場領域では全く記事がない。

次に、父親の子育てへの積極性と子育て役割の内容の関連についてみておく。表 2 は、子育てへの積極性別の父親の子育て役割の記事件数である。具体的な役割が書かれたものをみていくと、子育て全般に主体的・積極的に関わっている父親は、子育てへの積極性が高いほど多い。逆に、妻の手助け程度に関わっている父親は、子育てへの積極性が低くなるにつれて多くなり⁸、遊び中心の父親も同様の傾向を示している。つまり、父親の子育てへの積極性が高いほど、

⁷ 分析対象の育休の取得期間は 3 日間～2 年間と幅が広い。なお本稿では、育休制度を利用せずには有給休暇等に対応したもの、転職や退職で子育てに専念する期間をとったものも、仕事を中断して子育てをしたケースとして「育休取得」に分類した。

⁸ 「育休取得」で「妻の手助け程度」の父親は、育休の取得期間が 1～2 週間と短期で、妻も同時期に産休や育休を取得しているため、主体的・積極的に関わる必要がなかったと考えられる。

子育ての内容は主体的に子育てをする母親により近いものになるといえる。
この傾向をふまえて、次節以降では領域別に記事の内容をみていく。

表 2 子育てへの積極性別 父親の子育て役割の記事件数

子育てへの 積極性	父親の子育て役割							
	家事および子育て全般				遊び中心		その他 (役割不明も含む)	
	主体的・積極的		妻の手助け程度					
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	102	71.8%	13	9.2%	3	2.1%	24	16.9%
積極的	71	48.6%	54	37.0%	12	8.2%	9	6.2%
できる範囲で	0	0.0%	51	60.0%	23	27.1%	11	12.9%

※比率は、各子育てへの積極性における割合

3-2-1 家庭領域

表 1 のとおり、家庭領域については、父親の子育てへの積極性によって記事件数に大きな差はみられない。そして、内容はすべて父親が子育てをすることによって家庭領域の中に居場所ができるというものとなっており、子育てによって居場所がなくなるというものはなかった。内容は主に、(1)家族と一緒の時間、(2) 子育ての楽しさ・辛さ、(3) 家族との絆、に分けることができる。

(1)家族と一緒の時間は、子どもや妻と一緒に過ごす時間を大切にすることが、子育ての楽しさ・幸せや家族との絆につながっていくというものである。例えば、休日は家庭の時間にすることを心がけているという父親は、「できるだけ娘の要望にそって一緒にいる時間をとるように心がけています」(傍点は筆者、以下同) という。そのおかげで、娘が「すごくなついで、夜は必ず手をつないで」寝るようになり、「自分は幸せだと思えるようになった」と、子どもと一緒にいる時間が親子の絆を深め、それが自分の幸せにつながったと語る。

他にも、妻と一緒に時間で夫婦の絆が深まったというものがみられる。例えば、出産予定日に合わせて 2 週間の休暇を取得した父親は、「出産までのつらい 5 日間を寄り添って一緒に過ごせたこと、立会い出産での感動、生まれてからの幸せな時間、とかげがえのない体験をすることができました」と語る。

これらの例からは、家族と共に過ごす時間の中で妻子と経験や体験を共有し、関係を築くことによって、父親が家庭領域内に居場所を得る様子がうかがえる。

また、子育てへの積極性によって差がみられないのは、たとえ短くても家族と一緒に時間を作ることで、父親は居場所を得ているということができるだろう。

(2) 子育ての楽しさ・辛さは、家庭で父親が子育ての楽しさ・幸せや辛さを感じ、それを共有することによって、妻子と良好な関係になるというものである。例えば、妻の妊娠をきっかけに転職した父親は、「保育園へのお迎えは、僕の役目」「オムツ換え、離乳食作り、お風呂、寝かしつけ」など子育て全般に関わることで「仕事で味わう達成感とは違う、幸せに満ちた幸福感」が得られるといい、子どもの成長を間近に見られることが「育児にタッチしていなかったら、絶対味わえない喜び」だと語る。そして、「娘の幸せが、自分の幸せ。そんなふうに自然と思えるようになりました」と、父親の子育ての喜びや幸せが、子どもとの良好な関係につながっていくことを示している。

また、子育ての辛さを妻と共有することも大切、という例もみられる。育休を1ヶ月半取得した父親は、自分が主体となって家事や子育てをする中で、「今までよりも自分の家の中でできることが増えて楽しいし、なによりも娘が成長する姿を目の当たりにできることがうれしいです」という。そして、「同時に、やっぱり毎日〔子どもと〕ずっといっしょにいるとイライラしちゃうという気持ちもちわかってきました。妻とこういうところを共有できるのも育休の大きなメリットだと思います（〔 〕内は筆者の補足。以下同）」と語る。

これらの中には、“父親の子育て役割の獲得”がみられる。上記の例にも「保育園へのお迎えは、僕の役目」「自分の家の中でできることが増えて楽しい」とあるように、父親は子育て役割を獲得することによって子育ての楽しさや辛さを感じることができる。そして、それを妻子と共有することで良好な関係を築くことができ、家庭領域内の父親の居場所獲得につながっていくと考えられる。

(3) 家族との絆は、父親の子育てによって家族の絆ができる・強まるというものである。例えば、3ヶ月間の育休を取得した父親は、「仕事に比べれば楽なものだろうと高を括って」いた子育てに体力的にも精神的にも煮詰まったが、先に復職した妻からのメールや言葉掛けなどのフォローによって、順調に育児をすることができるようになった。この経験を父親は、「育児の苦労・悩みを夫婦間でシェアし助け合うことで夫婦・家族の絆を深めることができた」「育児って子供を育てるだけでなく、家族の絆を育てるんだなと実感」したと振り返る。絆という言葉以外にも、「こどもとの距離が近くなっていった」や「息子とは育

児休業を取得した事で「関係がより深まった」という表現もみられる。

他に、妻が助産師だという父親は、妻から「父親なら『手伝い』じゃ困るのよ。仕事も育児もお互い自立して、責任もってやってもらわなきゃ困るのよ」と言われたことを契機に、「育児はもちろん、料理だって、掃除だってするように」なり、「『手伝い』ではなく、夫婦がお互いがメインでできるようになれることで、家族の絆も強まったように思います」と語る。ここでも“父親の子育て役割の獲得”がみられるが、その内容は妻の期待に応える形となっている。同様の例は、妊娠中の妻の不安を軽減するためや、妻の仕事を続けたいという希望に沿って育児を取得する例にもみられる。つまり、妻からの期待に応じた子育て役割を獲得することによって、父親が家庭領域内に自分の居場所を得て、それが家族の絆を強めることにつながると考えられる。

このように、家庭領域においては、何らかの子育てに関わることで父親は居場所を得ることができ、それまで職場領域を居場所としていた父親が家庭領域内に居場所を得ることによって、境界の浸透性は高まる。そして、前述の表 2 でみたように、父親の子育てへの積極性が高いほど子育ての内容は主体的で母親に近いものになり、その浸透性の程度はより高くなると考えられる。また、父親の子育て役割の内容には、妻からの期待が影響していることが示唆される。

3-2-2 職場領域

前述の表 1 のとおり、職場領域についての記事件数は、「育児取得」が 36.6%、「積極的」が 8.9%、「できる範囲で」が 0%と、子育てへの積極性が高いほど多い。「育児取得」と「積極的」で約 20 ポイントの差があるのは、育児取得時には必ず職場と交渉する必要があるからであろう。また、「できる範囲で」の記事がないのは、父親が子どもが生まれた後も職場領域で期待される稼ぎ手役割を優先し、領域内の居場所に特に変化がないからだと考えられる。

職場領域については、上司や同僚など職場のメンバーからの反応が書かれているものが多い。職場のメンバーが理解を示せば、父親は良好な関係を保つことができるため、子育てに関わる前と同様に居場所を保持できる。例えば、子どもが予定日より早く産まれた父親は、「1 ヶ月も早く育児休暇に入ることになり、会社のメンバーにも大きな迷惑をかけることになってしまいました。でも、周りの人たちは快く育児休暇取得を認めてくれました」と語り、職場領域のメンバーの理

解によって良好な関係が維持でき、居場所を保持しているといえる。

なお、理解を示すのは父親の身近なメンバーでなくてもよい。会社で男性では初めての育休をとった父親が、「これまでまったく話したことも無い女性社員から、エレベーターや廊下ですれ違いざまに、肩をポンと叩かれ、『頑張っ
てね!』『勇気あるね』と声をかけられる」ように、職場のどこかに「心から応援してくれる人」がいれば、完全に居場所を失うことはない。むしろ、父親は子育てに関わることによって、それまでとは違うメンバーと関係を築くことになり、職場領域内の居場所を広げることにつながる可能性もある。

しかし、職場のメンバーが全く理解を示さない場合には、父親は居場所を失うことになる。例えば、これから育休を取得するという父親は、「父親の育児休暇取得に対する世間の風当たりや、職場への負担、家計の問題、父親としての金銭面での自覚（父親は外でストレスに耐え、お金を稼いでくることが本当の男の役割である）等、私には皆様の正当な反対意見が大きな障害のようにのしかかりました」と、男らしさというジェンダー規範を乗り越える難しさを示す。この父親は結果的に育休取得を決意したが、まだ「決心が揺らぐ時や、自分の決断が間違っていたかも、と不安」なときもあるという。

ここには、父親の“男としての稼ぎ手役割”と“親としての子育て役割”との葛藤がみられる。前述の例でも、父親の育休取得に対する「お金を稼いでくることが本当の男の役割である」という世間からの「正当な反対意見」は、父親が“親としての子育て役割”を優先することによって“男としての稼ぎ手役割”を果たせなくなることへの非難である。つまり、職場領域のメンバーが“男としての稼ぎ手役割”を重視する場合は、父親は子育て役割を優先することによって居場所を失う危険性が高まる。実際に分析対象の中には、育休を取得する際に「上司から『迷惑だ』」と言われた例や、ひどいものでは「育休が終わる頃には戻る部署が無くなって」しまった例もある⁹。

ここで、子育てへの積極性別に、職場領域内の居場所についての記事件数を表3に示す。職場領域内における居場所についての記事は、(1)ある場合、(2)ない場合、(3)ある場合とない場合のどちらもみられる場合（以下、「(3)ある・ない

⁹ 他に、子育てに関わるために自主的に退職し専業主夫になったケースが3件、転職したケースが10件みられた。

どちらもの場合)、(4)新たにつくる場合（以下、「(4)つくる場合」、の4つに分類することができる。

表3 子育てへの積極性別 職場領域内の居場所についての記事件数

子育てへの積極性	(1)ある		(2)ない		(3)ある・ない		(4)つくる		合計	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	22	42.3%	10	19.2%	4	7.7%	16	30.8%	52	100.0%
積極的	8	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	4	33.3%	12	100.0%

※表1のとおりに、「できる範囲で」の記事件数は0件だったため省いた。

「育休取得」と「積極的」は、どちらも(1)ある場合が一番多いが、「積極的」の方が約25ポイント高く、「積極的」な父親は「育休取得」よりも職場での理解を得られる可能性が高いことが示唆される。これは、「積極的」な父親は「育休取得」のように長期に休まず稼ぎ手役割を優先するため、職場での理解を得られやすいと考えられる。そのため、父親の子育てが稼ぎ手役割を脅かさない範囲内にとどめられることが多くなるのではないだろうか（船橋 2006；多賀 2011）。また、「育休取得」では(2)ない場合が2割弱、(3)ある・ないどちらもの場合が1割弱あるのに対し、「積極的」はどちらも全くない。これは、育休取得などで父親が子育てを主体的に担うときに、職場での理解を得るのにまだかなりの努力が必要であることを示している。そして、前例がなくても職場に働きかけて居場所をつくるという(4)つくる場合は、「育休取得」「積極的」どちらも3割強である。特に「育休取得」において(2)ない場合より(4)つくる場合の方が多いのは、当初は父親の子育てへの理解がない職場でも、父親自身の努力や周りのサポート次第で、理解が進む可能性があるということを示唆している。

以下では、境界の浸透性の変容をみるため、記事の中で父親の居場所の変化がみられる(4)つくる場合に限定して、データを詳細にみていく。

(4)つくる場合は、①ロールモデルとして会社が支援する場合（以下、「①会社が支援する場合」）、②自らがロールモデルになろうとする場合（以下、「②自ら前例になる場合」）、③上司や会社に交渉して育休や時短勤務にこぎつける場合（以下、「③会社と交渉する場合」）にわけられる。

①会社が支援する場合は、「社内で初めて男性として育児休暇を頂きました。初めてということで、これからの会社のモデルケースにしたいということで、

色々と支えてもらっています」と初めから支援する職場もある一方で、父親の育休は前例がないと認められなかった職場でも、父親自身が子育てへの関わりをみせていくことによって、「少しずつ浸透していき、イクフェス 2010 に社長から参加してきなさいと言われるぐらいイクメンとして会社でも認められてきてます！」と、父親の子育てを支援する方向に変えていった例もみられる。

②自ら前例になる場合として、6日間の育休を取った父親は「盆休みと有給で対処できる日数ですが、今回、あえて育児休暇の申請をしました」「あえて育児休暇を取る事で、会社にも家族にもそして自分にも、(育児は母親だけではなく、会社や家族みんなで、そして社会全体で取り組んで育んで行きたい) そんな気持ちを自分自身が再認識するとともに、会社にもこれからの新しい形の育児をアピールして理解してほしい」という。

最後に③会社と交渉する場合として、大企業で初めて長期の育休を取った父親は、「リーダーという立場にあり、取得に対して非常に悩みましたが、[中略] 男の育児休暇が当たり前になっているのを待つ訳にも行きませんので、後悔のないように取得を申し出」た。育休後に時短勤務を併せて希望したため、周りの人たちの理解は大変重要だと考えて、「先輩方に順番に説明して、理解を得てから、最終的に上司に申し出」、「一度は上司により拒否されたものの直接人事に掛け合うことでなんとか取得にこぎつけ」という。また他に、育児休業給付金の支給条件等で会社の持ち出しがないよう自分の勤務日を調整することで会社側を説得し、「職場の同僚、部下の協力もあり、業務に支障なく、休暇できました」という例もみられる。これらの例には、父親が子育てに関わるために、父親自身が職場領域内のメンバーに様々な形で働きかけることによって良好な関係を維持し、職場領域内に自分の居場所を保持する過程がみられる。

表4は、父親の子育てへの積極性別の①～③の記事数である。「育休取得」では③会社と交渉する場合が半数を占め、次いで①会社が支援する場合、②自ら前例になる場合となっており、会社に交渉することによって何とか育休を取得していることがわかる。また「積極的」は記事数が少ないが、①会社が支援する場合が半数を占め、③会社と交渉する場合が0件であることから、「育休取得」と比べて、職場領域内で反対されることがほとんどないと考えられる。つまり、父親の子育てへの積極性が高いほど、職場領域内のメンバーと交渉する機会が多くなることが示唆される。

表4 子育てへの積極性別 職場領域における(4)つくる場合の内訳

子育てへの 積極性	(4)つくる場合 内訳							
	①会社が支援		②自ら前例		③会社と交渉		その他	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	5	31.3%	2	12.5%	8	50.0%	1	6.3%
積極的	2	50.0%	1	25.0%	0	0.0%	1	25.0%

したがって職場領域においては、父親は領域内のメンバーに自分の子育て役割を理解してもらうことで、居場所を保持することができる。これによって、家庭領域の子育て役割が職場領域に持ち込まれることになり、職場領域の境界の浸透性は高まる。特に、育休取得などで父親が主体的に子育てすることは、領域内の新たなメンバーとの出会いや、上司や同僚などのメンバーとの交渉が増えることによって関係性が変容し、境界の浸透性を高める契機になると示唆される。しかし、父親の子育てへの積極性が低い方が職場のメンバーに理解されやすい傾向は、父親に稼ぎ手役割を重視する方向に向かわせ、職場領域の境界の浸透性を下げる方向に働く。

3-3-3 地域領域

表1のとおり、地域領域についての記事件数は、「育休取得」が19.0%、「積極的」が12.3%、「できる範囲で」が3.5%と、子育てへの積極性が高いほど多い。それぞれの差をみると、「育休取得」と「積極的」の差は小さいが、「積極的」と「できる範囲で」の差は約4倍と大きく開いている。これは、父親が子育てに積極的に関わることによって、子どもの通う保育園・幼稚園、学校をはじめとする地域社会と関わる機会が増えるためだと考えられる。

地域領域については、子育てをする父親として地域社会に受け入れられるかどうかについて書かれているものが多い。地域領域内に居場所がある場合としては、①母親たちの中に受け入れられる場合（以下、「①母親の中の場合」）、②父親の集まりの一員となる場合（以下、「②父親の中の場合」）に分けられる。

①母親の中の場合では、父親が同じ親として交流し、母親たちのインフォーマルな育児ネットワークの中に自分の居場所を得ている。しかし、「週に1回は子育てサポートプラザに行き、〔中略〕私〔父親〕はお母さんたちと情報交換を」することで居場所は確保できているものの、「パパ友がブログの中でしかいない

のが寂しいです・・・」と、同性の仲間がいないことを嘆く例もみられる。

②父親の中の場合は、「パパの会」や「おやじの会」などを立ち上げて、「父親の頑張る姿『おやじの背中』」を子どもたちに見せていくというものである。このような活動の中で、父親が積極的に子育てに関わるという価値観や経験を共有できる同性同士の間人間関係をつくることによって、自分の居場所を確保している。また、『おやじの背中』を子ども達に見せてやりたい」という語りからは、母親とは違う父親の男らしさを示したいという、男というジェンダーへのこだわりも垣間みえる。そのため、ここにおける父親の子育ては、母親への差異化によって男性化され、ジェンダーを再生産する可能性もある（巽 2013）。

地域領域内に居場所がない例としては、①物理的に父親の居る場がない場合と、②母親ばかりで父親が居づらい場合がある。

①物理的に父親の居る場がない場合は、母親なら当然用意されている子育て用の場が、男性ゆえに父親にはないため、地域で子育てがしにくいということがある。例えば、看護師の父親は育休中の外出先で「男性トイレにオムツ換えシートはなく、お店の人に相談すると女性トイレを貸していただくような状況に肩身の狭い思いをすることも多く外出することがおっくうになって」いったといい、父親の子育てが想定されていない状況から、地域に居づらさを感じている。

②母親ばかりで父親が居づらい場合としては、特に平日の昼間に行われる乳幼児健診や予防接種、親子の集まりなどにおいて、多数派の母親に父親が受け入れられていないと感じる場合があげられる。例えば、「検診などに行ったとき、おかあさんばかりでちょっと居場所に困ったりする」や、「小学校の保護者会は女性ばかりで凹みますが、負けじと参加してます」など、少数派であるために居場所がなく、孤独を感じていることがわかる。

次に、子育てへの積極性別に、地域領域内の居場所についての記事件数を表5に示す。分析対象記事は、父親の居場所について、(1)ある場合、(2)ない場合、(3)ある・ないどちらの場合、(4)つくる場合、(5)その他の5つに分類することができる。ここでは、上記(1)～(4)についてみていく¹⁰。

¹⁰ (5)その他には「子育てを通じ地域の一員として生活することの大切さを知りました」などがみられたが、地域領域内のメンバーとの関係性については書いていないため、分析から外した。

表 5 子育てへの積極性別 地域領域内の居場所についての記事件数

子育てへの積極性	(1)ある		(2)ない		(3)ある・ない		(4)つくる		(5)その他		合計	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	6	22.2%	12	44.4%	2	7.4%	6	22.2%	1	3.7%	27	100.0%
積極的	8	44.4%	5	27.8%	1	5.6%	2	11.1%	2	11.1%	18	100.0%
できる範囲で	1	33.3%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	100.0%

比率をみていくと、(1)ある場合は「積極的」が一番高く、次いで「できる範囲で」「育休取得」の順となっており、子育てにもっとも積極的な「育休取得」よりも「積極的」の方が高い。また(2)ない場合は、「育休取得」よりも「積極的」の方が低い。これは「積極的」の方が「育休取得」ほど子育てに専念しないために地域社会と適度な距離を保つことができ、かえって地域領域の中に居場所が作りやすいことが示唆される。また、「できる範囲で」の記事件数が少ないのは、仕事を優先するなど地域社会との接点が少ないからだと考えられる。

以下では、職場領域と同様に、境界の浸透性の変容をみるため、父親の居場所の変化がみられる(4)つくる場合に限定して、データを詳細にみていく。

表 6 子育てへの積極性別 地域領域における(4)つくる場合の内訳

子育てへの積極性	(4)つくる場合の記事内容					
	①母親の中		②父親の中		③男女に関わらない	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
育休取得	4	66.7%	1	16.7%	1	16.7%
積極的	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%

※表 5 のとおり、「できる範囲で」の記事件数は 0 件だったため省いた。

父親は居場所を得るために、地域領域内のメンバーに様々に働きかけている。その記事の内容は、前述の居場所がある場合の様に①母親の中の場合と②父親の中の場合、そして③男女に関わらない場合、に分けられる。表 6 は、それらの記事件数を子育てへの積極性別にまとめたものである。

「育休取得」では、①母親の中が一番多い。例えば、子どもが幼稚園に入る前の一年間、仕事を休んで子育てに専念した父親は、仕事に復帰した後も積極的に幼稚園に関わり、「園ではママさん達を中心となり、園のサポート活動をし

てましたが、そこへ、例外としてパパとして幼稚園イベントに協力」「男性としては唯一、私だけそのサポート活動への参加を認めて」もらったという。この父親は単に参加するだけでなく、自分も親として母親同様に認められるよう周りに働きかけることによって、幼稚園という場に居場所を得た。しかし、あくまでも「例外として」である。このことから、母親が多数派である地域領域内に少数派の父親が居場所をつくる難しさがわかる。

また、②父親の中の場合と③男女に関わらない場合は、「育休取得」「積極的」ともに1件ずつ見られる。②父親の中の場合としては、「イクメン仲間ができて、『子どもとギネス世界記録に挑戦するイベント』を開催できました」「沢山のパパ友をつくることができた」という例がみられる。③男女に関わらない場合として、育休後に戻る部署がなくなり専業主夫になった父親は、当事者として父親支援に関わる一方で、「僕の子育ての力になってくれた多くのママ友、地域の人たち、行政の人たち」といった子育てを通じて関係を築いた人との交流も男女に関わりなく大切にすることで、その中に自分の居場所を得ている。

このように地域領域においては、父親は領域内のメンバーに様々な働きかけを行うことによって居場所を得ることができるが、父親は地域とある程度の距離を保つ方が居場所を得やすい傾向がみられる。そして、それまで母親の場であった地域領域内に父親が居場所を得ることによって、地域領域の境界の浸透性は高まる。しかしその時に、父親が男というジェンダーにこだわるかどうかによって、どのような場やメンバーの中に居場所を得ようとするかが変わるため、男性に特化せずに母親と同等に地域と関わる場合の方が浸透性が高まると考えられる。しかし母親ばかりの中に居場所を得た場合は、父親は少数派となるために寂しさを感じるなど、居づらくなる可能性がある。

4. 考察

ここでは、前章で領域別に分析した結果を総合的にみることで、父親の子育てによる公私領域の境界における浸透性の変容と、それによって性別役割分業が解消に向かう可能性について考察する。

まず、子育てをする父親が各領域内に居場所を得ることによって、各領域の境界の浸透性はどのように変容するのだろうか。表7は、各領域の特徴および、父親の子育てへの積極性と居場所の得やすさをまとめたものである。家庭領域と地域領域

は主となるメンバーが子育て役割を担う母親（女性）であるため、そこに父親（男性）が居場所を得ることによって、各領域の境界の浸透性は高まる。また、稼ぎ手役割が主な職場領域においては、父親が自分の子育て役割を家庭領域から持ち込むことによって浸透性は高まる。したがって、どの領域においても「子育てをする父親」がその領域内に居場所を得ることによって境界の浸透性は高まるといえる。このように、父親個人の変化（鹿野 2007 ほか）だけでなく、それに対する各領域内のメンバーの理解や承認があることによって、父親の子育てが境界をゆるがす力となりうる。また、職場および地域領域でみられたように、当初はその領域内で「主体的に子育てをする父親」が認められていない場合でも、父親自身が周りに働きかけることによって領域内のメンバーの意識・行為の変化や、父親とメンバーの関係性の変容などによって、浸透性を高めていく可能性はある。

表 7 父親の子育てへの積極性による居場所の得やすさの違い

領域		その領域内で主となる		父親の子育てへの積極性と居場所の得やすさ
		役割	メンバー	
私	家庭	子育て役割	母親	積極性に関係なく、妻の期待に応える子育てをすることによって居場所を得られる
公	職場	稼ぎ手役割	男性	積極性が低い方が、居場所を得やすい
	地域	子育て役割	母親	積極性が高くなりすぎない方が、居場所を得やすい

その浸透性の程度は、父親が子育てに積極的であるほど、つまり、母親と同等に主体的に行うほど高くなると考えられるが、表7をみると、父親の子育てへの積極性が各領域内の居場所の得やすさにつながるとは限らないことがわかる。特に職場や地域という公領域では、父親の子育てが主体的になることによって、逆に父親が居場所を得にくくなる可能性がある。職場領域では、父親は子育てに関わるほど稼ぎ手役割を果たせなくなり、領域内のメンバーに認められなくなる可能性が高くなるため、居場所を保持しながら子育てを主体的に行うことが難しい。地域領域では、母親の中に交じると、父親は居場所があっても少数派となるために寂しさを感じて居づらくなる場合もある。家庭領域においても、父親の子育てへの積極性よりも、妻が期待する子育て役割の内容によって父親の居場所の得やすさが変わることが示唆される。本稿のデータにはなかったが、もし、ジェンダー観の強い母親が

子育て役割を自分で抱え込み、父親に手伝い程度しか期待しない場合には、父親が主体的に子育てをすることは難しくなる¹¹。つまり、境界の浸透性を高くすることによって父親が居場所を失う危険性があれば、実現可能性は低くなる。

また、本稿で公領域としてとりあげた二つの領域には、職場領域は稼ぎ手役割を担う男が主であり、地域領域は子育て役割を担う母親（女性）が主だという違いがある。そのため、父親が多数派の中に居場所を得ようとする、職場領域では稼ぎ手役割、地域領域では子育て役割と、領域によって異なる役割が期待される。このことから、各領域内において父親に期待される役割は、理論上の公私区分や性別によってのみ決定するのではなく、その領域内で主に期待される役割が優先される場合もあることが示唆される。そしてもし、子育てを主な役割とする領域で子育てが女性役割と規範化されると、父親は男性であるために役割獲得が難しくなり、居場所を得られなくなる可能性がある。

この居場所を失う・得られない危険性は、積極的に子育てに関わろうとする父親を稼ぎ手役割に引き戻す力になりうる。特に、稼ぎ手役割が重視される職場領域では、父親が子育てに関わろうとすればするほど、父親が稼ぎ手役割だけをしていた時にはみえなかった男らしさというジェンダー規範が明らかとなる。実際に本稿のデータにおいても、育休取得のためにハラスメントを受ける例が少なからずみられた。そして、その規範の力が強い場合、職場領域に居場所を保持したい父親ならば、稼ぎ手役割を脅かさない範囲内で子育てに関わることになり（船橋 2006；多賀 2011）、父親の子育てによる境界の浸透性は低くなるだろう。

また、地域領域でみられた「おやじの会」のように、父親が自身の男らしさにこだわって子育てをする場合は、母親との差異化によってジェンダーが再生産される（巽 2013）。その結果、母親を中心とする地域領域とは別に父親に特化した地域領域を作り出すことになり、領域間の境界はかえって強化される可能性もある¹²。したがって、父親の子育てが境界の浸透性を高めるためには、男というジェンダーにこだわらず、母親同様に主体的に子育てに関わる必要がある。

¹¹ この意味で、男性化された父親の子育ての場合（巽 2013）と同様に、子育てを抱え込んでしまう母親もジェンダーを再生産すると考えられる。

¹² 「おやじの会」の効果として、地域領域において少数派の父親を可視化することがあげられる。また、その活動内容が男らしさにこだわらないものであるなら、境界の浸透性を高める契機となる可能性もあるため、男性だけで活動することが全てジェンダーを再生産するとは限らない。

これまでの考察をもとに、次の仮説をたてることができる。「父親が男らしさにこだわらず母親同様に主体的に子育てを行い、さらにそれを各領域内のメンバーが認めることによって、領域の境界の浸透性が高まり強度がゆるむ。その結果、子育てというケアを尊重しながら各領域がゆるやかにつながり公私区分を崩すと、それに規定される性別役割分業が解消していく可能性がある。」つまり、父親の子育てが性別役割分業の解消の契機となるためには、その内容が母親とダブルスタンダードではないこととともに、周りの人びとがそれを理解して認めることが重要なのである。

5. おわりに

本稿では、父親の子育てによって公私領域がゆらぎ性別役割分業を解消する可能性について、各領域の父親の居場所と境界の浸透性に注目して考察し、主体的な父親の子育てで浸透性が高まることによって性別役割分業が解消される可能性があるという仮説を構築した。また、公領域に地域領域を加えて考察することにより、性別役割分業は公私区分のみに規定されず各領域で期待される役割の方が優先される場合もあることを示唆した。

これまで、父親の子育ての意義については、子ども、母親、父親自身という個人への影響について注目されることが多かった。それに加えて本稿では、父親の子育てと公私領域との関連を総合的にみていくことによって、性別役割分業の解消に向けた、父親の子育ての新しい可能性を開くことができた。

なお、本稿で分析した「育休・育児体験談」は政府のHPに掲載されたものであり、家族イデオロギーやジェンダーの再生産をもたらす可能性を含んでいることは否めない。しかし、この投稿の中に現れた具体的な父親の子育てを公私領域という視点からみると、性別役割分業を規定している公私領域を崩す可能性をもっている。筆者は、このように公私領域を崩すことが子育てなどのケアの尊重に向かうことを期待しているが、逆に、職場でも家でも仕事をするようになるなど、職場領域等の公領域の拡大に向かう可能性もある。また、性別役割分業の解消とともに、保育サービスの拡充など、子育ての社会化も必要である。これらについてはさらなる検討が必要だが、紙幅の関係から今後の課題としたい。

本稿の限界としては、分析対象に投稿記事を用いたため、領域間の影響については十分な検討ができなかった。実際には、各領域間を父親が行き来するこ

とによって、ある領域内のメンバーとの関係性の変容が他の領域内のメンバーとの関係にも影響し、その変化が領域や境界の浸透性にも影響していくと考えられる。また、父親が子育てに主体的に関わろうとする時には、例えば職場領域のメンバーがその父親の分の仕事を引き受けるなど、父親以外の人の役割にも影響を与えるため、父親と各領域内のメンバーとの関係とその変容をより深く考察することも必要である。これらについては今後の課題とし、インタビュー調査などで仮説を実証していくことによって、改めて検討していきたい。

引用文献

- Clark, S.C. 2000 Work/Family border theory : A new theory of work/family balance, *Human Relations*: 53, 6 : 747-770.
- フレイザー, ナンシー 2003 『中断された正義 — 「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』お茶の水書房.
- 船橋恵子 2006 『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房.
- 星敦士 2012 「育児期女性のサポート・ネットワークが well-being に与える影響 : NFRJ08 の分析から」『季刊・社会保障研究』 vol.48 No.3 : 279-289.
- Ishii-Kuntz, Masako 2003 Balancing fatherhood and work: Emergence of diverse masculinities in contemporary Japan, J.E. Roberson and N. Suzuki (eds.), *Men and Masculinities in Contemporary Japan*, Routledge Curzon : 198-216.
- 石井クンツ昌子 2013 『「育メン」現象の社会学 — 育児・子育て参加への希望を叶えるために —』ミネルヴァ書房.
- 石本雄真 2009 「居場所概念の普及およびその研究と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第3巻第1号 : 93-100.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響 : 社会的背景の異なる2つのコホート比較から」『発達心理学研究』第13号第1号 : 20-41.
- 柏木恵子・若松素子 1994 『「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み』『発達心理学研究』5 : 72-83.
- キテイ, エヴァ・フェダー 2010 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』岡野八代・牟田和恵監訳 白澤社.

- 厚生労働省 2010 「報道発表資料」
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000725v.html> (2013/08/18).
- 2013 「イクメンプロジェクト」 <http://ikumen-project.jp/index.html>
(2013/07/26).
- ラム, M. E. 1981 「父親の役割：その全体的展望」『父親の役割 乳幼児発達との
かかわり』久米稔ほか共訳 家政教育社：7-42.
- 牧野カツコ 1982 「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀
要』第3号：34-56.
- 牧野暢男 1996 「父親にとっての子育て体験の意味」 牧野カツコ・中野由美子・柏
木恵子編 『子どもの発達と父親の役割』：50-58.
- 松田茂樹 2001 「育児ネットワークの構造と母親の well-being」『社会学評論』
52(1)：33-49.
- 宮坂靖子 2008 「育児の歴史 父親・母親をめぐる育児戦略」『男の育児・女の育
児—家族社会学からのアプローチ』 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編 昭和
堂：25-44.
- 中西友美 2000 「若い世代の母親の居場所感についての基礎的研究」『臨床教育心
理学研究』 vol.26 No.1：87-96.
- 庭野晃子 2007 「父親が子どもの『世話役割』へ移行する過程 — 役割と意識と
の関係から —」『家族社会学研究』18(2)：103-114.
- 佐々木卓代 2009 「子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己
受容感 — スイミングスクールを対象とした調査から —」『家族社会学研究』
21(3)：65-77.
- 沢山美果子 2013 『近代家族と子育て』 吉川弘文館.
- 総務省統計局 2011 「平成 23 年 社会生活基本調査」
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/index.htm> (2012/12/12).
- 多賀太 2011 「育児するサラリーマン — 育児ができないつらさ、仕事ができない
つらさ」 多賀太編著 『揺らぐサラリーマン生活 — 仕事と家庭のはざまで
—』 ミネルヴァ書房：99-126.
- 巽真理子 2013 「雑誌における「男」の子育て」『女性学研究』20号：140-161.

How Does Fatherhood Influence the Public and Private Domains?

Tatsumi, Mariko

In this paper, I construct a hypothesis about the possibilities for change in fathers' gender roles. I make use of two concepts—“permeability” of the border between the public and private domains and “Ibashi”—in analyzing data from father’s columns about rearing their own children on “Ikumen” HP, and construct the hypothesis that if fatherhood allows high permeability of the public/private border, the father’s gender role may change.

Most studies of the meaning of fatherhood focus on the influences on children, mothers, and on the father himself. But in this paper, I consider synthetically the relation between fatherhood and the public and private domains, in order to open new possibilities for fatherhood involving change in gender roles.